

東京農業大学
拓友会ニュース

第33号・2017年発行

発行所 東京農業大学拓友会

〒156-8502 東京都世田谷区桜丘1-1-1

TEL.03-5477-2408 FAX.03-5477-4032

e-mail : takuyu@nodai.ac.jp

http://www.nodai.ac.jp/int/original/about/index.html

会長新任の挨拶

拓友会会長 大塚 正明



この度、長尾文博会長の後を受けることになりました。専門部拓殖科、農業拓殖学科、そして現在の国際農業開発学科の卒業生約8,500人を有する拓友会の新会長として、本会の発展に微力ながら貢献したいと思いますので、皆様のご指導とご支援のほど、どうかよろしくお願ひいたします。

私は農業拓殖学科14期ですが、在学中に1年間インドで海外実習をしましたので、卒業は15期の皆さんと同期になります。学生時代は、熱帯殖産研究室(現在は、熱帯作物学研究室)に所属し、栗田先生、西山先生、早道先生に師事しました。今や第1号館も解体され、世田谷キャンパスも大きく様変わりましたが、研究室が入っている2号館だけは全く変わっていないため、今でも学生時代を懐かしく思い起こすことができます。

昨年は、東京農業大学創立125周年、農業拓殖学科60周年の記念すべき年でした。この歴史的節目に、校友会が主催して「世界大会」が9月23日に開催され、世界で活躍されている多くの拓友会会員も集まりました。大会式典の各国代表講演で、拓友会会員の一人でもあるタイのタマサート大学科学技術学部長ソムチャイさんが、「東京農業大学は、なかなか卒業させてくれない大学だ」という話をされました。農大で学位を取得され、帰国後も繋がっている大学との絆を表現されたのですが、拓友会の設立趣旨にも叶い、感慨深く聞き入っていました。

私も、特に海外に滞在しているときなど、卒業後も農大との繋がりを有難く思ったものです。いつでも答えてくれる農学的なアドバイスのみならず、国内外の人脈は卒業生共有の財産でしょう。この貴重な大学との繋がりや卒業生としての人脈を、常に世代を超えて活性化していくことが拓友会の目的であると思います。

昨年、実践的な農業を修得する場として「NPO法人農人と人を拓く学び舎向志朋(こうしほう)」を、農大卒業生の仲間とともに千葉県白井市に立ち上げました。農業を基盤とする国際協力や国内の地域活性化に取り組む人材の育成を目的としていますが、拓友会の一つの拠点として、大学や卒業生との繋がりを維持するための接点になればと、考えています。

卒業させてくれないユニークな学風のもと、拓友会会員の絆をさらに堅固にし、会員及び大学の双方にとって意義ある拓友会とすべく、特に若い世代の会員に対しては頼りがいのある会にしたいと思っています。

会員の皆様のご健康とご活躍を祈念し、今後とも一層のご支援とご協力を願い、就任のご挨拶とさせていただきます。



第59期総会および懇親会のご案内

第59期の拓友会総会および懇親会を次のとおり開催致します。

今年度も収穫祭期間中に開催します。数々の特別イベントも計画されていますので、万障お繕り合わせの上、多数ご出席下さいますようご案内申し上げます。

なお、平成29年の収穫祭は11月3日(金)より11月5日(日)に開催されます。11月3日はホームカミングデーの式典も開催されます。

どうぞ皆様お越し下さい。なお、懇親会のみの参加も歓迎します。お問い合わせはこちらに連絡をお願いします。

〒156-8502 東京都世田谷区桜丘1-1-1 東京農業大学国際農業開発学科 志和地 弘信
Fax:03-5477-4032 E-mail:h1shiwac@nodai.ac.jp

● 総会

- 日時 平成29年11月4日（土）午前11時より12時まで
- 場所 2号館3階 国際農業開発学科 共通利用室

● 懇親会

- 日時 平成29年11月4日（土）正午より
- 場所 2号館3階 国際農業開発学科 共通利用室
- 会費 4千円（配偶者、子供の同伴歓迎致します。
配偶者および子供は、一人につき2千円）

農業拓殖学科と途上国

農業拓殖学科26期 昭和63年卒 大光 英人

気がつけば、農大に係って以来ずっと途上国と係り続けていっていると言えるだろう。

途上国デビューは昭和59年度1次隊で参加した青年海外協力隊で「野菜栽培隊員」として行ったケニアの海岸の街。620キロ離れた標高の高い首都ナイロビとは違って湿気が多く暑いマリンディだった。はやる心が抑えられず、3年生の終了後、卒業を待たずに旅立つことになる。社会経験も農業の経験もまだまだで、任地マリンディでの出だしの半年はあまりにも日本と違う環境や道徳心、スワヒリ語を中心とした生活に慣れず、つらい毎日の半べそ状態であったと言える。前任とは2週間ほど重なり、自分のやり方をやれば良いとして、自分の活動をあまり説明しないドライな人だった。しかし地方農業事務所の職場からは、前任のしていた、トマト、ナスなど果菜類の苗づくりと配達を行って野菜栽培を普及することを求められた。まずはそれをするしかない状況で、踏襲しつつ農家を訪問しては苗を配るだけではなく苗を自分で作ってもらうよう、もう一歩進んだ野菜栽培の普及を目指した。また、任地で担当するはずの野菜栽培は“Vegetable Growing”だったが、実際は“Horticultural Officer”であり、要するに野菜だけでなく果樹や花卉を含む園芸担当であった。1年もたたずに経験のなかったマンゴーやオレンジといった果樹の接ぎ木の普及が野菜栽培より増えていた感があった。生活や仕事に慣れず、気がつくと2~3か月日本語を話さない辛かった半年が過ぎると、スワヒリ語も慣れてきて毎日の生活も楽しくなり、1年を過ぎる頃には一生この地に住みたいと考えるようになっていた。残念ながら学業半ばであり、任期が終わると後ろ髪を引かれる思いで日本に帰国した。日本で頭を冷やし、多くの拓殖精神に燃えた先輩方の途上国での格闘を思い起こし、あんな生活は癖になるから追い求めてはいけないと心に決め、でも、あと一回だけ途上国長期生活を経験出来たらきっぱりと足を洗うと心に誓っていた。

ケニアにいた頃に感じたODA支援の難しさ、実効性、感謝のされ方などを思い返すと極めて政治的な部分もあったりして、その政治的な部分は現場には届かず、勝手に来たくて来ているのだろうと感じ取れるものであった。帰国後、やはり心に誓ったのは、「ODAではなくビジネスで途上国と対等に付き合って行きたい」であった。途上国を知るためにアフリカに続けて行くのではなく、違う環境の別の国と考えた。そして、商社に入社して主にタイからの農水産物輸入の担当を2~3年行うのだが、なかなか当初約束してくれたバンコク駐在を任せてくれそうもない。築地の取引先の問屋に誘われるまま転職し、暗いうちから築地市場の競り場に出かける修行を経て、バンコクでの検品、交渉、商材開発のための駐在員としてようやく望んでいた海外での2度目の長期生活を達成することができた。ただし、日本の不況から農水産物の需要が落ち込み、その生活は1年半で終了した。消化不良の気持ちが残った。それだけでなく、転職を余儀なくされたことになる。固く心に誓ったはずのODAではなくビジネスを、の気持ちちは揺らいでしまった。貿易といったビジネスでもないODAの世界に協力隊以来7年ほど戻ってきてしまったのだ。生活のためとはいえ何とも自分の心を裏切った気の晴れない日々が続いたが、その晴れない気持ちを前進させてくれたのは、拓殖の先輩だった。「ODAの現場では素晴らしい支援もたくさんある」の一言である。そう思い込まなければやり切れないことも事実である。その気持ちを持ちつつ、コンサルタントとして資料作りや途上国などの調査業務をこなす日常が1993年から10年ほど続いたろうか。それほど数が多いとも言え

ない20か国を切る程度の途上国で調査業務を行った。また、さらにコンサルタント業務を推し進めるための別会社を4名で2001年に出資設立し、代表取締役として現在に至っている。

そのような中、また、悪い虫が動き出した。短期で行っている調査にストレスを感じるようになったことも原因であろう。調査業務は現場2週間で、出張の前後ひと月程度の仕事であるが、非常に駆け足で報告書を仕上げいかなければならない。本当に現場のことが見えて報告書にしているのか非常に不安だった。長期での途上国滞在は封印としたはずの思いが搖るぎ出したのである。バンコク駐在からすでに20年近く経過しており、希望したからと言って仕事に就けるとは限らず、むしろ難しい挑戦であったと言える。もう農業と言えるバックグラウンドもなく、目指したのは青年海外協力隊のボランティア調整員で、長期派遣されることを目的とした挑戦であり、なんとか一度の応募でJICAボツワナ支所勤務として2009年に採用されるに至った。思えば、バンコクから帰国した1993年に、実はボランティア調整員に応募しており、タンザニアの内定が取れていた。しかし、就職先の会社からは国内勤務中心を申し渡されており、その時はかなりうなだれながらもあきらめた経緯がある。20年前に置き忘れたものが届いたような気持であった。ボツワナには2年半の滞在であった。20年ほどで枯渇すると言われているダイヤモンドが経済のほとんどを回しており、農業と言えるのはかなりほったらかしに近い牛の放牧であり、ボツワナ人は朝日晚と牛の肉を食べられる、主食であると言い切る人たちであった。現実的にはパパといって、ケニアでよく食べていたトウモロコシの粉を煮ながら焼る餅のようなウガリと同じで、ケニアよりやや軟らかめにできている印象のものが主食と言えた。ボツワナでの生活は非常に野生的で、首都ハボロネを出ると道路の標識がすぐに120km/hrとなる。道路は平たんでまっすぐで幅が広い。場所によってはゾウもキリンもシマウマにも一般の道路上で遭遇することがある。また、家畜や野生動物と車との衝突が絶えず、事故は何度となく目撲し、国中の道路には無数の急ブレーキの跡が残っている。夜や夕方走行するのは特に危険であり、夕方には2~3度ほど野生の鳥がフロントガラスに激突し、割れことがある。はじかれた石により割れたこともあります。滯在中5~6枚は割ってしまったような気がする。人口120万人程度で国土の大きさは日本の1.5倍でありボツワナの真ん中にはカラハリ砂漠がある。ひと月置きにそのカラハリ砂漠を環状に囲んでいる道路を1周して各地のボランティアに会いに行くのが主な仕事で、月曜日に首都を出て金曜日には首都に戻るおよそ2,000kmの旅に何度も出たことか。雨期の土砂降り以外はほとんどが乾燥している国であり農業もままならないが、村落開発普及員をしているボランティアから「収入創出のために農業を教えてもらいたい」という私への一言が自分自身の何かを動かしたのを感じた。農業に係りたい気持ちが自分の中に強くあることに自分で気づかされたボランティアの一言だった。ボツワナでの2年半が終わり、もはや長期で途上国に滞在することに何も疑問を持たない自分がおり、数か月後には東ティモールの企画調査員としてJICAの在外事務所に勤務することとなった。「農業・農村開発」の事務所の担当であるが、業務には今現在力



事務所スタッフ家族との交流(ボツワナ)

を入れている水産も含まれている。農業担当としての業務は初めての経験と言えることのオンパレードで、事務仕事より体を動かすタイプの自分にはきりきり舞いの毎日と言えた。

東ティモールにおける日本の農業セクターの援助は灌漑施設を建設することと灌漑稲作プロジェクトを実施することが建国前から主であった。2000年頃に世銀が中心となり建設した多くの灌漑施設はすぐにすべて壊れたりして機能マビとなっていた。私が赴任した当時、世銀はそれまでの灌漑建設方針から180度転換し、きちんとしたメンテナンスもできない国に灌漑施設を作るのは無駄というレポートや日本に対して灌漑施設はやめるべきとのメッセージを頻繁に送るようになった。これが無視できなくなり、現在建設中の灌漑施設以外は作らないという急激な転換期を任期中に迎えていた。日本が灌漑施設を作つて稲作プロジェクトを実施するシナリオで調査が始まっていたにもかかわらず、日本は今後灌漑を作らないので、調査の結果を使って東ティモール政府が灌漑施設を作るようにとした苦しい瞬間的な目的の転換でもあった。東ティモールはおよそ450年間のポルトガル統治と30年弱のインドネシアによる強制的な併合を経て2002年独立し、21世紀で一番新しい国だった。その後南スダダンが建国され、2番目に新しい国となった。統治機能が途上國の中でも突出して脆弱と言え、人的資源を含め、すべてのインフラが整っておらず、課題が山積みと言える。中でも乳幼児の50%前後が栄養不良であったり、ボツワナ同様に120万人の人口、10年程度で枯渇すると言われている石油資源で経済が回っている国であったりするため、石油に代わる産業を速やかに作らなければならない国である。

2012年から、JICAの中小企業を活用した途上国支援と企業のビジネス展開を目指す事業が始まった。2016年半ばに4年の任期を終えて帰国し、ケニア協力隊から帰国して以来の、「ビジネスで途上国と対等に付き合うことができる取り組み」の思いがこの中小案件ではできると思っている。ビジネスと途上国支援ではまじりあうことのなかった民間企業とJICAの間に入って調整することは至難の業である。協力隊で帰国してから30年以上たち、図らずも自分で決めたことを反故にしながらいろいろな経験をしてきたが、気がつけばPublic Private両側の経験を持ち、常に途上国に接してきた経歴は、目指していた仕事に役に立つことばかりの結果となった。思えば、自身のこの30年以上にわたる原動力、生き方のきっかけは拓殖学科とそこに集まってきた人たちの切磋琢磨がなければあり得なかつたと感じている。

30年たってやっとしたいことの緒についた。盤石という言葉に縁がない生活がもう少し続きそうであり、それがなんだか自分にとっては拓殖っぽいと感じてしまう。



稲作農民への合同インタビュー
(東ティモール)



危険な道路が多く存在する
(東ティモール)

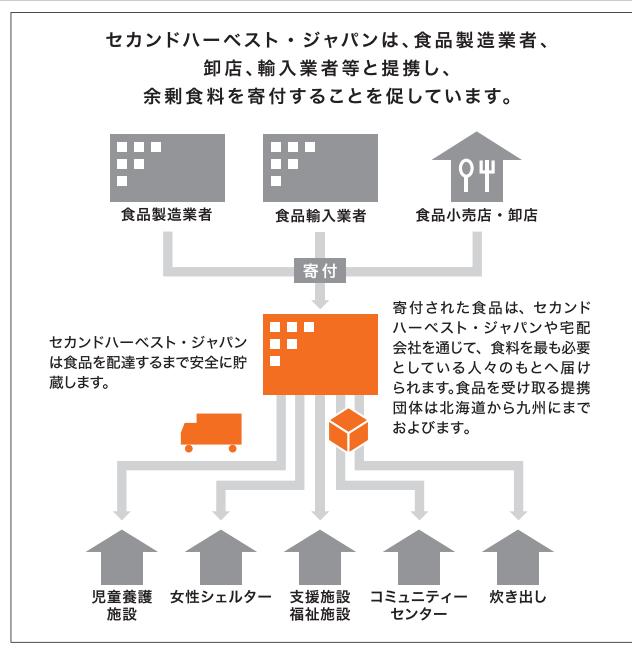
食品ロスを有効活用する新たな方法、セカンドハーベスト・ジャパンとは？

国際農業開発学科 42期 芝田 雄司
セカンドハーベスト・ジャパン パントリーマネージャー

子供の頃、私は両親からよく「食べ物は無駄にしないこと」「お米1粒、汗千粒」という言葉を聞き育ちました。そのおかげで食べ物に対して無駄なくちゃんと食べるという習慣が身についたと思います。しかし、ちょっとした不注意や何かの理由でどうしても食品を捨ててしまうことがあります。後で食べようと思っていたり、作ったままそのまま放置してしまったり。その時は「ああ、もったいない。ごめんなさい」と心の中で食品に謝罪し、次回こそしっかり無駄なく使うぞと思いつながら日々の食事に感謝するということをしています。皆さんもそういった「もったいない」と思う経験は結構あるのではないかでしょうか？

現在、私はセカンドハーベスト・ジャパン(以下2HJ)というフードバンク活動を行っているNPO法人の専従スタッフとして勤務しています。このフードバンクとは1967年アメリカで始められた活動で、企業や個人からまだ十分に食べられる品質に問題ない食品を無償で寄付してもらい、食品を必要とする福祉団体や個人へ提供するという活動のことをいいます。この活動はアメリカだけではなく世界に広がり、現在33カ国で行われています。日本では2000年頃から始まり、2002年に2HJが日本で最初の法人化されたフードバンク団体として活動を始めました。

このフードバンク活動の背景には食品ロスと貧困という2つの社会的課題があります。日本の食品ロスは621万トン(環境省 食品ロス・食品廃棄物等の利用状況等(H26年度推計))あり、そのうち家庭から282万トン、事業系では339万トンも出ているとされています。その一方で日本の相対的貧困率は15.6%(H28年厚生労働省 国民生活基礎



調査)となっています。これは可処分所得が年間122万円以下の状況にいる人が日本に約2,000万人いる計算になります。フードバンクはこの2つの課題の間にいる橋渡しの役目を担っています。この活動を行うことで複数の面でメリットがあります。食品ロスの削減や環境負荷の低減効果、福祉分野への貢献などです。そもそも食品を生産するときに多大なエネルギーを使いCO₂を排出しますが、これを食品として使わずに廃棄または飼料や肥料へリサイクルすることはCO₂を再排出することになります。作った食品を食品として最後まで使うことで更なるCO₂の発生を抑制するので環

行政、社会福祉協議会への説明会
(中央は筆者)

境負荷の低減効果があると考えられます。また、生活に困った方が食料支援によって満足に「食べる」ことが保障され、生命が維持されれば、生活困窮の方々が抱える様々な課題の解決

につながることになります。余剰食材を福祉に活用し、困窮者支援をすることで当事者の生活が改善し自立すれば結果的に福祉予算の削減にもつながると考えられます。

2HJでは「全ての人に食べ物を」そして「もったいないをありがとうへ」というスローガンのもと日本におけるフードセーフティーネットの構築に向けて活動しています。フードセーフティーネットとは誰もが経済レベルに関係なく、明日の食事について心配すること無く、いつでも必要なときに栄養のある食べ物を得ることができる仕組みです。私はこのフードセーフティーネットの構築を担当しており現在、東京と神奈川の行政や社会福祉協議会、民間の生活支援団体(130団体前後)と連携し、必要な方々に食の支援が届けられる仕組みづくりをしています。また、東京2020:10万人プロジェクトと銘打ちまずは緊急的に食品を受け取ることが出来る拠点(フードバンチー)を75箇所作り、そのインフラを整

備していく予定です。この拠点は言わば交番と同じで、普段は利用しないけど何かあったときに交番に行けば何とかなるということと同じように、食に困ったら頼れる場所として地域にあることで安心をもたらすことが出来るようになると考えています。

農大生や東京農大卒業生は食べ物について何らかの形で関わっていると思いますが、今回お伝えした食品ロスや日本における貧困についても考えていただきたいと思います。農産物の生産調整や規格外品、商習慣である3分の1ルールなどによって多くのもったいない食品が廃棄されている一方で昨今の経済状況の変化や社会構造の変革、それによる非正規雇用の拡大や雇い止め、介護離職や病気による失職、老後破産など今後自分の身に起こるかもしれない社会不安が日本では増大してきています。フードバンクという仕組みは余剰食品を福祉分野で有効活用する非常にユニークで単純な仕組みです。今後の日本を考える上で今一度自分たちが携わっている日本の食や農業のあり方について考え、拓殖スピリツで行動してみてはいかがでしょうか?



必要な方への食料支援(フードバンチー)

国際農業開発学科の動静

2016年度の本学科(入江憲治学科長、入江満美主事)の動静は以下の通りである。

2016年		
3月	20日	2015年度卒業式(卒業者166名)
4月	2日	2016年度入学式(入学者163名)
	6日~7日	新入生学外オリエンテーション (神奈川県立足柄ふれあいの村)
	8日	前学期授業開始
	14日~20日	農業開発実習(第1班、東京農大宮古 亜熱帯農場にて、学生45名、引率:真田篤史助教)
5月	21日	農大創立125周年記念式典およびホームカミングデー
6月	5日	教育懇談会
	2日~8日	農業開発実習(第2班、東京農大宮古 亜熱帯農場にて、学生42名、引率:飯森文平助教)
7月	9日~10日	地方教育懇談会
8月	1日~5日	前学期定期試験
	7日~8日	キャンパス見学会
	6日~9月22日	夏季休業
	28日	中高校生向けサマーワークショップ 「1日体験 世界の食糧問題を解決する国際農学系」
9月		
	5日~9日	農業総合実習(1年生、伊勢原農場にて)
	21日	編入学試験
	23日	後学期授業開始
	29日~30日	第16回世界学生サミットを 東京農業大学世田谷キャンパスにて開催
10月		
	12日~18日	農業開発実習(第3班、東京農大宮古 亜熱帯農場にて、学生35名、引率:三簾久夫准教授)
	28日~11月2日	収穫祭
	29日	拓友会第57期総会、懇親会
11月		
	1日	体育祭
12月		28日~1月4日 冬季休業
2017年		
1月	5日	後期授業再開
	30日~2月3日	後学期定期試験
	31日	卒業論文提出締め切り
2月		
	5日~11日	農業開発実習(第4班、東京農大宮古 亜熱帯農場にて、学生42名、引率:パチャキルバビル助教)
3月	20日	卒業式

住まい作りのトータルプランナー
宅地建物取引業 千葉県知事免許(10)第6298号

 南房商事株式会社

代表取締役 藤井 勝政(拓殖1期)

〒297-0029 千葉県茂原市高師57番地
電話 0475(23)3251(代表)



テーブルガーデンセンター

TEL 045-935-4187(代)

FAX 045-935-4187(代)

代表取締役社長 篠原 敬一(拓殖20期)

2016年度 東京農業大学国際農業開発学科卒業論文 拓友会賞

カンボジアにおける地雷・不発弾被害による障害者の生計の現状—バッタンバン州ラタナモンドル郡スタオコムユンを事例として—

農業開発政策研究室 細野 沙紀
指導教員 杉原 たまえ

本論文は、カンボジアにおける地雷・不発弾被害をうけた障害者が、農村でどのような生活を送っているのかを、現地調査にもとづいて著述したものである。現在、国内では農業と福祉の連携が、途上国では開発と障害の連携に、大きな関心が寄せられている。貧困であることと障害を抱えていることは、双方が原因と結果を成しており、途上国の農村開発において、障害者の存在はもはや福祉分野にとどめておくことはできない課題である。著者が、調査・研究対象としたのは、紛争による不発弾や地雷により障害を抱える件数の多い、カンボジアのバッタンバン州である。

論文は全5章から構成されている。第1章では課題の設定と研究方法が述べられている。第2章 カンボジアの概要では、カンボジア社会の概要と障害者の現況が概観されている。第3章 地雷についてでは、地雷とは何か、またどのような歴史的経緯により地雷が埋設されるようになったのかをまとめている。紛争直後にピークであった地雷被害は、近年減少しつつあるものの、撤廃にはこの先長い時間を要すること、また、本研究の調査対象地域は、カンボジアでも最大の汚染地域である

ことを示している。第4章 調査分析では、調査してきた内容が取りまとめられている。地雷被害による障害の程度を独自に評価し、5段階に区分したうえで、生計の在り方を検討している。そこで重要な指摘は、①障害の重さが經營耕地面積の制限要因にならないこと ②むしろ障害を理由に政府から土地が支給される元兵士は、より広い農用地を所有していること ③カンボジアの貧困ライン以上のグループでは、食費に9割以上の家計費を費やし、次いで携帯電話が多く、社会的交流機会を持ちにくいこと ④カンボジアの貧困ライン以下のグループでは、エンゲル係数が低い分、財の保有状況も多く、社会的交流機会を多く保っていること などである。第5章では、結論と提案が述べられている。

論文として、分析が十分に行われていない点や、データ収集の限界などもあるものの、著者の本論文を含むこれまでの取り組みは、以下のような点で優れていると指摘できる。①本学科入学後3年生までの間に3回にわたりカンボジアの農村で実習を行い、4年時には障害と開発を研究課題として携えて Royal University of Agriculture(カンボジア王立農業大学)に1年間留学をした。②地雷の最大級汚染地域での調査であり、先行研究も多くない中で、データを収集したこと、③4年間の開発と障害に関する研究経験を活かし、卒業後は国内で本格的ブドウ生産とワイン醸造をソーシャルビジネスの形で展開しているこころみ学園に就職する。以上の点から、優秀卒業論文としてふさわしいと判断し、推薦させていただきます。

受賞の感想と近況

農業開発政策研究室 細野 沙紀

この度は、拓友会賞を頂き、ありがとうございました。このような光栄な賞を頂き、心から嬉しく思っております。論文を完成させるにあたり、農業開発政策研究室（現農村開発協力研究室）の先生方、同期、後輩にはたくさんお世話になりました。ありがとうございました。また、この論文は、カンボジア王立農業大学に留学した際にお世話になった先生や、カンボジア人の友人がいなければ完成できなかっただと思います。この場を借りて感謝を申し上げたいと思います。

私は、農業開発政策研究室に入り、「農福連携」という課題に興味を持ちました。そして、障がい者のおかれている差別的現状と、障害と貧困問題は切り離せないことを学びました。そこで、以前から関心のあったカンボジアに、この課題を深めるべく留学いたしました。カンボジアでは、ポルポト政権下の内戦などのために、今なお地雷や不発弾の被害を受けて障がい者となる人々が多く存在します。そうした障がい者の雇用創出のためのプロジェクトに取り組む日本

の NGO にもお世話になりながら、現地での卒業論文研究に取り組みました。

また、もともと国際協力に従事したいという希望で国際農業開発学科に入学させていただいたのですが、一年間のカンボジアでの生活を通じ、日本の障がい者の現状そのものに無関心であったことも痛感しました。そこで、大学卒業後本年 4 月から、生まれ故郷である東京を離れ、栃木県足利市にある障がい者支援施設こころみ学園に就職し、生活支援員として働き始めました。本施設利用者の方たちは、ワイン用ぶどう生産の農作業や、椎茸の栽培に従事しています。彼らの製造するワインは、主要国首脳会議でも使われるなど、その品質はすでに世界的な評価を得ています。私は現在、施設内で障害を持った方々の生活支援する仕事に従事しておりますが、ここ、こころみ学園は、一人ひとりがとても生き生き伸び伸びとしている施設だと思っています。皆様にも日本の障がい者の農業分野の就労に関する現状を少しでもご理解いただけると幸いです。

カンボジアへの思いをはせながら、まずは身近の人々のお役に立ち、一日でも早く一人前になれるように日々精進していきたいと思います。

静岡県島田市伊久身における在来種茶葉の成分特性

農業環境科学研究室 青木 良太
指導教員 田中 信行

本研究の内容と成果を要約すると、日本の茶産業において、栽培品種がやぶきた種に偏重している現状から派生する収穫時期や病害虫罹災時期の集中、ならびに、品質や取引価格の低下等の問題を打開する対策の一つとして、茶の伝統的栽培地に残存するいわゆる「在来種」のなかから、新たな茶品

種作成に有効と考えられる成分特性や機能性成分を探索することを目的とした研究を実施し、その結果、わずかな栽培種のみが有するメチル化カテキンを含有する在来株を発見したことが最大の成果である。

本研究の調査対象地は静岡県島田市伊久身地区とし、当地の茶栽培畑において、江戸時代から残存する在来種から16株と比較対照のやぶきた種の茶葉を採取し、茶の品質評価に必須な、全窒素量、遊離アミノ酸量、タンニン量、カフェイン量を測定するとともに、カテキン類の定性分析を行った。

その結果、遊離アミノ酸量については、やぶきた種が2.49%であったのに対し、在来種A1が5.17%、C2が4.99%E1が4.30%と、在来種の14株はやぶきた種より多量であった。しかし、遊離アミノ酸量と正の相関関係にあるはずの全窒素量は、遊離アミノ酸量の結果とは異なり、やぶきた種5.24%を上回る在来種はA1、A3、C2の3株のみであった。カテキン類の定性分析の結果、通常一部の紅茶用品種にしか検出されない、エピカテキンメチルガレート(-)-Epicatechin 3-(3"-O-methyl) Gallate (ECG3"Me)、および、エピガロカテキンメチルガレート(-)-Epigallocatechin 3-

(3"-O-methyl) Gallate (EGC3"Me;以下、メチル化カテキン)が在来種A2、A3の2株から検出された。メチル化カテキンは、べにふうき茶など数品種の茶で含有が確認され、近年注目される花粉症改善効果が認められた成分である。

以上のように本研究は、地域茶農業を再び活性化させるために、やぶきた種とは異なる特性や機能性成分を含む在来種を活かした新しい茶品種を創生できる可能性を示した。また被推薦者の青木君は、ISF(世界学生フォーラム実行委員会)の副委員長を努めるなど世界各国の学生間交流にも活躍した。そこで本卒論を優秀論文賞候補として推薦致します。

受賞の感想と近況

農業環境科学研究所 青木 良太

この度は、平成28年度国際農業開発学科卒業論文において拓友会賞をいただきましたこと、とても光栄に思っています。卒業論文を完成させるにあたり、農業環境科学研究所の諸先生方をはじめ、先輩、同期、後輩には大変お世話になりました。この場を借りて感謝を申し上げます。また、静岡県島田市伊久身のNPO法人伊久美楽山舎の西野恭正様には、本研究の調査にあたり供試茶園場の提供及び製茶工場の貸し出し、同地区と在来茶の歴史的背景についての説明等、大変お世話になりました。ご支援とご協力に心より感謝申し上げます。

私は「静岡県島田市伊久身における在来種茶葉の成分特性」という題目で卒業論文を執筆しました。学部時代に参加していた世界学生フォーラム実行委員会で、日本の農業・農村の勉強の場として度々訪れていた静岡県島田市伊久身の在来茶種に着目し、やぶきた種に対抗する地域特有の種の創出を目的とし研究を行いました。研究を行っていくにあたり、私が一番重要だと感じたことが「何事も鵜呑みにせず疑うことから始

める」ことです。茶の実験の抽出方法は論文によって様々で、一体どの抽出方法が私の求める実験結果にふさわしいのか。そんな疑問から、各種様々な薬品を用い何度も同じ実験を行い納得のいく方法を探し、それから卒論の実験項目にある研究を行いました。また、一つの実験項目が終わり次の実験に移る時は、自分が納得いく反復性が得られるまでプレ実験を行っていました。それらの積み重ねにより、卒業論文は納得のいくものができたと考えています。また、この卒業論文が拓友会賞を受賞できたことは、伊久身の方々にも喜んで頂き非常に嬉しく感じています。

現在私は、東京農業大学大学院の同研究室でマングローブと言う植物の保全についての研究を行っています。具体的には、伐採により減少しているマングローブ林を、姿形を残したまま利用できる新たな換金方法の確立のため、マングローブ葉を嗜好飲料の原料として利用する加工方法の検討の研究です。卒業論文では茶を題材にしていましたが、嗜好飲料としての評価ということで、実験項目で重なること多く卒業論文の経験を活かすことができています。また、今回の受賞を励みにして、修士論文の執筆を頑張って行きたいと思います。

拓友会特別賞

受賞のことば

福岡 啓



こんにちは。トライアスロン競技で2020年東京五輪、更には2024年の五輪でメダル獲得を目指している福岡啓と申します。私は、15年間競泳を続けていましたが、大学から始めたアルバイトがきっかけで大学2年生からトライアスロンを始めました。何で卒業してまでスポーツをするのか、果たしてそれが自分の将来を考えた時に正しいのか、そのようなことを大学を卒業してからはよく考えていました。

実は、私は大学を卒業する1か月程前に、所属チームを退団しました。チームにいればサポートを十分にしていただけますが、仕事としてスポーツを考えた時、自分を厳しい環境に置くべきだと思い決断しました。うまくいかどうかはやってみなければ分からぬと思っていましたが、独立後は、うまくいかないことだらけでした。

円満な関係で所属チームを退団しなかったことと、自分の不器用な性格によって、予想以上に周りの方々からも非難されたのです。だんだんと自分の今後が不安になり、強くなりたい思いで独立したにも関わらず、一人の”スポーツ選手”としてやってい

ぐ自信を、持てなくなくなる時もありました。毎日、練習よりも自分の行動や考えに自問自答しながらトライアスロンをするのかを本気で考える日々が続きました。

ですが、そんな中で出場したレースで応援してくださる方々はまだいて、「こんな私に少しでも期待してくださる人がいる」と嬉しく感じられ、結果どうこうよりもスポーツを通して人として成長し恩返しがしたい、と改めて思うことができました。

前半シーズンは、このように色々ありましたが、結果としては一番狙っていたU23アジア選手権では優勝し2連覇をすることができました。前半戦の他の主なレースの結果は以下の通りです。

- ・7/21 U23日本選手権(仙台):優勝
- ・7/2 ASTC U23アジアトライアスロン選手権
(インドネシア・パレンバン):優勝
- ・3/5 アメリカンカップ(コスタリカ・プラヤエルモサ):3位
- ・2/27 コンチネンタルカップ(キューバ・ハバナ):4位

「もうダメだ」と諦めてしまえば、それ以上の成長はないですが、どうすればこの状態を突破できるかを考えることが大事だと実感した前半シーズンになりました。そして、そのように考えられたから得られた結果でありますし、そう考えることができたのも応援して下さる方々のお陰であるので、改めて周り



の支えがあるからトライアスロンが出来ていると感じました。才能の有る無しに関わらず、どんな壁が来ても乗り越えられる選手になり、スポーツを通して成長したいと思います。今後とも応援よろしくお願ひいたします。



また、平成28年度オーストラリア連邦派遣日本武道代表団の一員として、武道の国際的理義と普及振興活動に貢献した安川宏章さんにも拓友会特別賞が贈られました。



株式会社 国際農業開発

黒柳 俊之

南足柄で農業を始めました。

長年勤めたJICAを辞したのを機に、海外展開も視野に入れ、株式会社国際農業開発を立ち上げ、2017年4月に神奈川県南足柄市に「楽しく、儲かる農業、色んな人が集まる農場」を目指し農業参入した。農場は、富士山、温泉、酒の三要素が揃っている南足柄に決めた。うまい酒は、美味しい水が不可欠、そしておいしい水が湧くところは農産物も旨い。南足柄にはアサヒビールの工場があるほど旨い水が出る。

儲かるには程遠いが、「楽しい、人が集まる」は、ぼちぼち軌道に乗りつつある。南足柄に参入してから、数多くの人たちが農場に来てくれる。元同僚を始め、日大の学生や、農大経由でタマサート大学の学生2人を2か月受け入れた。また協力隊を目指す

農学科の学生も受け入れている。嬉しいことに、この学生、わが社での「実習」が農業経験として認められたのか協力隊試験に合格した。人だけではない、昨年12月から同居の柴犬ポチに加え、7月にヤギの勘吉と勘子も迎えた。ポチや勘吉、勘子は農場に放しているのだが、人懐こく近所の人気者になりつつある。

1,000m²の畠から始めたが、現在は田んぼ7,000m²、畠6,000m²、果樹園2,200m²まで拡大した。変わったところでは、酒米900m²を作っている。来年はこの酒米からできた新酒で大宴会を計画している。皆さんも是非遊びに来て下さい。大歓迎です。



見合中のポチと勘吉&勘子

新任教職員紹介

熱帯作物保護学研究室 本橋 廉一



2017年4月から地域環境科学部より国際農業開発学科、熱帯作物保護学研究室に異動いたしました本橋廉一と申します。本研究室では、農作物を含む植物に寄生する菌類に関する研究を行うこととしています。どうぞ、宜しくお願い申し上げます。

私は2001年3月の修了まで国際農業開発学専攻、熱帯作物保護学研究室にて、植物寄生菌類の分類、分子系統関係について学びました。その後、2001年4月からは北興化学工業株式会社に就職し、農薬事業の技術営業として約3年間、名古屋支店にて愛知県および三重県を中心に農薬の普及・拡大、販売促進を行っていました。2004年には同社農薬事業からファインケミカル事業の化成品研究所へ移り、化成品の防カビ(防菌防黴)に関する研究に従事しました。これら4年間の社会人

経験の後、2005年から2008年の間、三重大学大学院にて、樹木病原菌の分類に関する研究を行い、学位を授与され、2008年から2010年は縁あって岐阜大学流域圏科学研究センターでポストドクターとして、やはり植物病原菌に関する分類等に関する研究を続けてきました。これまで菌類に関して農業生産現場や企業の研究所、大学にて多方面から学ぶ機会に恵まれ、これらの経験を本学科での教育に生かしていきたいと考えています。また、これまでの経験から「人のつながり」が特に重要な事だと感じています。学生時代や仕事でお世話になった方々は自分の立場が変わった場面で、一緒に研究や仕事を行うことも多く、また私にとって公私ともに多くの支えや助けにもなりました。大学教育において、学生の知性を養うだけでなく、人のつながりも持つて、いかなる社会においても活躍のできる人材を出すことも目標としたいと考えています。とはいってもまだ浅学の身、諸先輩方々のご指導、ご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

まちに彩りを、人の心に潤いを



株式会社 ムラカミ シード
MURAKAMI SEED CO.,LTD



本社

〒309-1738 茨城県笠間市大田町341
TEL 029-77-0354 FAX 029-77-1295
E-mail : info@murakami-seed.com
http://www.murakami-seed.com



ガーデンショップ
花みどり

〒319-0323 茨城県水戸市鯉渕九ノ割5986
TEL 029-259-6332 FAX 029-259-6226

ムラカミシード 〒319-0323 茨城県水戸市鯉渕九ノ割5986
TEL 029-259-6332 FAX 029-259-6226

代表取締役会長 村上典男(拓殖23期)

村上 登(拓殖26期)

村上 忠義(拓殖29期)

熱帯作物学研究室 寺田 順紀

2017年4月から助手として国際農業開発学科に加わりました寺田順紀です。開発学科52期卒で、2017年の3月に国際農業開発学専攻を修了いたしました。研究室は熱帯作物学研究室に所属しております。

大学院では植物が有する香りについて興味を持ち、研究をしてきました。私たちの暮らしの中で、食品香料や石鹼、シャンプー、トイレの芳香剤に至るまで、様々な形で利用されている植物の香り成分ですが、意外にその香りを作る植物自身にどのような意味を持っているのかについてあまり多くのことは知られていませんでした。しかし研究を行っていくと、植物の香り、特に“みどりの香り”と呼ばれる植物の青臭みの成分が、植物ホルモンの生成を増加させたり、環境ストレス耐性を向上させたりすることが徐々に明らかとなっていました。この話だけを聞きますと、すごく細かな研究をしていると思われる方もいらっしゃると思いますが、作物に香りを嗅がせることで簡単に生長をコントロールするなど、途上国の中規模な農場においても利用できる新しい

技術をもたらす可能性が期待されます。

私が座右の銘としている言葉の一つに「窮屈暢遠」(びをきわめとうくにのぶ)という言葉があります。この言葉は、緑茶の香気成分を世界で初めて明らかとした武井三吉の言葉であり、難解なことも基礎をしっかりと行えば、おのずから道は開かれるという意味です。世界に羽ばたく人材を育んでいく国際農業開発学科において、助手として学生により近い立場で、基礎を固め、深く学び、巣立っていけるよう、これまで培った知識や経験を注ぎ込み全力でサポートしていきたいと思っております。

とはいって、私自身も若輩者でこれから多くのことを学ばなければいけません。学生たちと共に成長していきたいと思います。卒業生の皆さんにおかれましては、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



ドローンを用いた
静岡県の茶園における調査

熱帯作物保護学研究室 高田 亜由美



今年の3月に国際農業開発学専攻博士前期課程を修了し、4月より熱帯作物保護学研究室で助手を務めております。学生時よりお世話をしていた研究室で教員という立場になるというのはなんとも不思議な気持ちです。私の研究テーマは「熱帯作物に発生するBegomovirusの同定と検出法の改良」です。具体的な研究内容を説明する前にBegomovirusについて少し述べたいと思います。Begomovirusとは植物ウイルスの属名で日本ではトマトやトルコギキョウで発生するトマト黄化葉巻ウイルス(Tomato yellow leaf curl virus、こちらは種名)、海外ではキャッサバやワタなどで発生するAfrican cassava mosaic virus、Cotton leaf curl virusなどの被害が深刻であることが知られています。ウイルス病は発生が確認されてからの対処が非常に困難なた

め、早期発見早期防除が非常に重要であることはご存知の方が多いかと思います。実際にウイルスの有無を確定するにはなんらかの実験的手法をもって行われ、現場すぐに判断がつかないこともあります。そこで、私の研究では単純にどのような Begomovirusが発生しているのかを調べるほか、途上国でのサンプル採取から検出までの手法を簡便にするにはどのようにしたらよいかということに取り組んでおります。これまで主に取り扱っていた作物はトマトとキャッサバで、サンプル採取のためにウガンダ、ベトナム、カンボジアへ行く機会をいただきました。特にウガンダへの渡航は開発学科にいたからこそ得られた機会で、外では得難い経験だったと思っています。高校生のころ、授業で人生の予定表を書く機会があり30歳のころにアフリカへ行く、と書いていたのですがまさかこんなに早く機会が訪れるとは予想外でした。開発学科と関わっている期間は先輩方に比べるとまだまだ短く、今後も予想外のこと見舞われると思いますがフロンティア精神をもって臨んでいこうと思っています。どうぞ今後も暖かく見守っていただければ幸いです。よろしくお願ひいたします。

国際農業開発学科事務室 葛本 亜由子

前任の松本八重さんの異動に伴い、2017年4月より国際農業開発学科事務室に事務職員として着任いたしました、葛本(クズモト)亜由子と申します。

横浜生まれ、横浜育ち、現在は大学から自転車で15分圏内に在住しています。他大学で国際政治学を専攻し、卒業後は、証券

会社、外資系銀行で主に営業に従事しておりました。今回、縁があり、東京農業大学の中で歴史ある開発学科の一員に加われたことを大変嬉しく思っております。

東京農業大学と言えば、幼少期から親しみのある箱根駅伝や学生服を着た大根踊りの印象がとても強かったのですが、近所に越してきてからは、地域に根付き、地域に愛され、勤めだしてから

農大市場

株式会社メルカード東京農大

カムカムを主力とした
農大商品、農大OB商品を販売

〒156-8502

東京都世田谷区桜丘1-1-1

東京農業大学11号館1階

TEL:03-5477-2250

FAX:03-5477-2251

Web:<http://ichiba-n.co.jp>

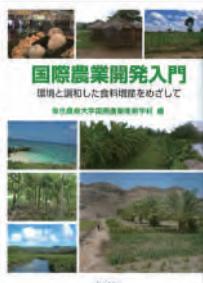
は、母校愛が強く、とても包容力のある大学だと感じるようになりました。学内を歩いていると、学生は、親切で優しく、私が困っているとすぐに助けてくれる。挨拶もしっかりするし、何事にも一所懸命。そのような姿を見ると、本当に感心させられます。それは、農大のカラーなのかもしれません、日頃の先生方の教育の賜物だとも思っています。

先日、開発のとある先生が仰った、「教育とは「寛容」であること」という言葉がとても心に響きました。今の「不寛容」社会に慣れていた私にとっては、目の覚めるような言葉で、教育現場に身を置いた私も「寛容」な人間になりたいと強く思っています。

末筆となります、事務職員として未熟な私に、いつも優しく、根気強く教えて下さる、学科長の入江憲治先生、主事の入江満美先生を始め、開発学科に携わっておられる先生方、これまで支えてこられたOB・OGの方々に感謝申し上げます。一日も早く、事務職員として成熟し、安心して仕事を任せて頂けるように、精一杯努力していきます。今後もご指導、ご鞭撻を賜りますよう、お願い申し上げます。



著書紹介



東京農業大学国際農業開発学科編
『国際農業開発入門』(2017)
筑波書房 293p 1,800円
ISBN: 978-4-8119-0506-8

本書は、国際農業開発学科(旧、農業拓殖学科)の創立60周年を記念し、「熱帯農業入門」など、同学科低学年次に開講される科目のテキストとしても活用されるよう刊行されました。執筆者は、同学科現役教員17名で、うち、自然科学系教員がおもに第1部「熱帯の環境と発展の可能性」を担当し、熱帯地域の自然環境の特性や多様性、熱帯の遺伝資源や作物の有する潜在力、作物の育種・育苗、病虫害管理方法や重要性に加え、食

料の生産や農業開発を行うにあたり注意すべき環境や生態に対する配慮などについて論述しています。他方、第2部「熱帯農業の発展手法を考える」では、おもに社会科学系の教員が主体となり、開発経済学、農業経済学や農産物流通に関わる国内外の課題を抽出したのち、地域・伝統的・社会の理解のしかたや適切な農業経営方法について考え、また、近年における農村・農業開発事例における課題・問題点を指摘しています。このように本書の内容は多岐にわたりますが、「国際農業開発」をあらためて問うきっかけにもなればと期待しています。また本書は、5年おきに改版する計画であることから、学科卒業生や国際農業開発に関係される方々をはじめとする皆様方に広くお読みいただき、ご批判・ご感想をお寄せ頂ければ幸いに存じます。(中西康博)

在学生の活躍

東京農業大学大学院長期履修制度を利用した博士前期課程 履修と青年海外協力隊活動

国際農業開発学専攻博士前期課程 吉田 雅之

初めまして、東京農業大学大学院国際農業開発学専攻博士前期課程、吉田雅之と申します。この度、私は長期履修制度を利用し、入学いたしまして、平成30年1月より青年海外協力隊3次隊にてネパール連邦民主共和国へ派遣される予定です。

今回私は、本制度を利用し、青年海外協力隊派遣期間中に、派遣地域西方の西部開発区域ダウラギリ県バグレン郡にて、地域植物資源の保全と利活用に関する研究を行います。バグレン郡は、標高が約650mから約4,300mの起伏が激しい山岳地域に位置し、多種多様な動植物を有しています。人口は、27万人ほどの中、民族もまた多様で、Bramhan族、Chhetri族、Magar族、Newar族、Gurung族、Chhantyal族、Thakali族などが居住し、それぞれが独自の文化を形成し共存しています。そのため、

バグレン郡の多様な自然環境、植物、文化条件のもとでは、多種多様な地域植物資源が日常的に利用されていると考えられます。そこで、今回、同地域内で利用される植物を対象として地域植物資源を探索収集、さらに、それらの生態系サービスの経済的価値を考察し、そこから得られた知見をもとに、現地住民の収入向上とその地域経済の発展に寄与をすることを目的として、地域植物資源の利用・開発を行い、社会実装に取り組みます。

本研究は、青年海外協力隊で予定されている地域野菜の生産性向上のための技術改良、普及等の活動と密接な関係性を持っており、生産性向上を図る上で、必要不可欠となる、食生活、在来の作物や植物に関する知識、地域の環境との関係性などの解明につながります。



T 株式会社東京アグリビジネス
TOKYO AGRIBUSINESS CO., LTD.
緑地防除管理・請負メンテナンス・資材販売

代表取締役社長 野瀬 忠
(昭和52年 拓殖18期)

〒252-0302 神奈川県相模原市南区上鶴間2-7-7
TEL 042 (744) 6237
FAX 042 (744) 6295

農業生産法人 (株)ライフオン

桶 口 稔
(拓殖 10 期)

〒059-0272 北海道伊達市北黄金町 119-47
〒181-0004 東京都三鷹市新川 3-15-12
Tel:0422-48-8976
Mobile:090-3203-4950

前述の内容の調査を行うにあたり、従来であれば、課程2年間の間に調査、執筆を含めて実施しなくてはならないところですが、今回は、長期履修制度により青年海外協力隊派遣期間の2年間を調査等に活用でき、また帰国後の1年間を執筆等

に利用できるため、通常よりも多くの情報を得られる可能性を持っており、より深く充実した研究ができるのではないかと考えております。良いご報告ができるよう、来年1月より励んでまいりたいと思っております。

「東京農業大学校友世界大会2016 in Japan」が盛大に開催

2016年9月23日、東京農業大学校友会主催「東京農業大学校友世界大会2016 in Japan」が世田谷キャンパス百周年記念講堂で開催されました。この大会は、大学創立125周年に合わせておこなわれ、初の校友会主催世界大会となりました。式典には、海外14支部、国内46支部の役員、一般参加者、大学関係者を含め380人が参列されました。

開会に先立ち、元台灣支部長・謝克昌様(2015年12月ご逝去)、前ブラジル支部長・沖真一様(2016年5月ご逝去)並びにご逝去された多くの校友に黙祷を捧げました。その後、大会実行委員長の豊原秀和校友会常任理事の開会の辞で式典が開会、校友会を代表して三好吉清会長のご挨拶をいただきました。

学校法人東京農業大学理事長大澤貴寿先生、東京農業大学学長・同短期大学部学長高野克己先生のご祝辞に続き、海外支部を代表して、原島義弘氏・ブラジル支部長(南米地域)、松尾健一氏・カナダ支部長(北米地域)、ソムチャイ・チャカタカーン氏・タイ支部長(アジア地域)からご挨拶をいただきました。その後、基調講演として高野克己学長とフィリピン大学

フェルナンド C サンチェス学長の両名のご講演がありました。午後の学内視察後、パンアメリカン代表石川準二氏、ブラジル代表佐藤卓司氏による記念講演がおこなわれ、大会副委員長の宮林茂幸校友会常任理事の閉会の辞にて大会は幕を閉じました。

その後、明治記念館「富士の間」に会場を移し、秋篠宮文仁親王殿下のご臨席の下、450名超の参加者にて大会祝賀会が盛大に行われました。祝賀会は、外園憲校友会副会長の開会の辞で始まり、昨年度創立60周年を迎えた国際農業開発学科の入江憲治学科長も記念のご挨拶をさせていただきました。懇親会では、国境を越えた旧友や恩師との再会、校友同士の新たな交流など、世代や学部・学科を超えた様々な校友の懇親・懇話に花が咲き盛り上りました。また、国内外の支部代表からの近況報告や校友の活躍ぶりなどが披露されました。

翌24日、25日は海外支部校友を中心に約130名がオプションツアーに参加し、さらに交流を深めました(以上、東京農業大学校友会ホームページからの抜粋)。

慰靈碑建立45周年記念慰靈祭

東京農業大学校友会ブラジル支部
総務理事 戸国 達夫



ブラジル支部では、2017年7月30日に慰靈碑建立45周年記念慰靈祭を実施した。日本から、新部副学長、校友会本部小野常任理事事務局長、拓友会佐藤副会長、小野名誉教授、武井

校友、前田校友、松田校友、パラグアイ支部校友、アルゼンチン支部校友、アマゾンの遠方など支部各地の会員が参列し盛大な集まりとなった。墓地慰靈碑には、理事長、学長、校友会長、教職員、パラグアイ支部、アルゼンチン支部の花輪が並ぶ中、浄土宗の導師様による法要が行われ先人を弔った。常盤松会館に移動して開催した45周年記念式典では、来賓各位からは

真摯な祝いの言葉と祝いが贈られ、支部と慰靈碑委員会の功労に対して大学より感謝状が授与された。支部からも大学、法人、校友会に御礼の記念品を贈呈し、終了間際には原島会長自らの指揮により70人を越える参加者が学歌を高らかに誇り高く齊唱し閉会となった。引続きの親睦会は南米3支部の懇親会も兼ね、高松相談役の乾杯で始まり、和やかに、同窓の旧友と先達を押し、生を喜び、別れ際には再会を楽しみにする約束を交わして楽しい一日を過ごした。



ふれあいの旅を演出する (株)アルファインテル

代表取締役：佐藤 貞茂 (拓殖15期)

電話: 03-5473-0541
FAX: 03-5473-0540
www.alfainter.co.jp
info@alfainter.co.jp

〒105-0004 東京都港区新橋 3-8-6 大新ビル 3階
平日 9:30~18:30 土曜日 9:30~12:00 日・祝日は休み

観光庁長官登録旅行業1835号
IATA(国際航空運送協会)公認代理店
社団法人海外ツアーオペレーター協会正会員



東京都知事登録旅行業第3-5792号



キックス・エアー・チケット
株式会社 キックス

代表取締役 塩満 仁

〒187-0003
東京都小平市花小金井南町2-17-2-603
Tel 042-458-1180 Fax 042-458-1180
携帯 090-1761-0970
E-mail shiomitu@bird.ocn.ne.jp
E-mail info@kix-j.co.jp

<http://www.kixairticket.com>

第57期 会計収支決算

(平成27年10月1日～平成28年9月30日)

一般会計

収入の部	予算	決算	差異
1. 会費	1,800,000	1,640,000	▲ 160,000
卒業生	1,750,000	1,560,000	▲ 190,000
既卒者	50,000	80,000	30,000
2. 事業	430,000	362,000	▲ 68,000
ニュース広告	250,000	200,000	▲ 50,000
行事等収入	180,000	162,000	▲ 18,000
3. 寄付金等雑収入	50,000	78,000	28,000
4. 前年度繰越	40,865	40,865	0
合 計	2,320,865	2,120,865	▲ 200,000

支出の部	予算	決算	差異
1. 事業支出	1,200,000	1,107,706	▲ 92,294
総会費	180,000	178,544	▲ 1,456
新入会員歓迎会費	200,000	200,000	0
名簿整備	100,000	100,000	0
ニュース発行	420,000	393,054	▲ 26,946
拓友会賞	100,000	56,108	▲ 43,892
在校生への補助	200,000	180,000	▲ 20,000
2. 管理費	900,000	712,886	▲ 187,114
会議費	100,000	89,964	▲ 10,036
印刷費	20,000	0	▲ 20,000
交通費	50,000	42,000	▲ 8,000
通信費	500,000	460,374	▲ 39,626
消耗品費	100,000	14,101	▲ 85,899
雜給費	100,000	100,000	0
雜費	30,000	6,447	▲ 23,553
3. 特別会計積立金	100,000	100,000	0
4. 予備費	120,865	0	▲ 120,865
5. 次年度繰越金	0	200,273	200,273
合 計	2,320,865	2,120,865	▲ 400,273

特別会計

収入の部	予算	決算	差異
1. 前年度繰越	2,324,897	2,324,897	0
2. 一般会計より繰入	100,000	100,000	0
3. 雜収入	350	35	▲ 315
合 計	2,425,247	2,424,932	▲ 315

支出の部	予算	決算	差異
1. 校友会世界大会祝賀会助成	500,000		
2. 次年度繰越金	2,425,247	1,924,932	▲ 500,315
合 計	2,425,247	2,424,932	▲ 315

第58期 会計収支予算

(平成28年10月1日～平成29年9月30日)

一般会計

収入の部	第57期	第58期	差異
1. 会費	1,800,000	1,700,000	▲ 100,000
卒業生	1,750,000	1,650,000	▲ 100,000
既卒者	50,000	50,000	0
2. 事業	430,000	430,000	0
ニュース広告	250,000	250,000	0
行事等収入	180,000	180,000	0
3. 寄付金等雑収入	50,000	50,000	0
4. 前年度繰越	40,865	200,273	159,408
合 計	2,320,865	2,380,273	59,408

支出の部	第57期	第58期	差異
1. 事業支出	1,200,000	1,200,000	0
総会費	180,000	180,000	0
新入会員歓迎会費	200,000	200,000	0
名簿整備	100,000	100,000	0
ニュース発行	420,000	420,000	0
拓友会賞	100,000	100,000	0
在校生への補助	200,000	200,000	0
2. 管理費	900,000	900,000	0
会議費	100,000	100,000	0
印刷費	20,000	20,000	0
交通費	50,000	50,000	0
通信費	500,000	500,000	0
消耗品費	100,000	100,000	0
雜給費	100,000	100,000	0
雜費	30,000	30,000	0
3. 特別会計積立金	100,000	100,000	0
4. 予備費	120,865	180,273	59,408
合 計	2,320,865	2,380,273	59,408

特別会計

収入の部	第57期	第58期	差異
1. 前年度繰越	2,324,897	1,924,932	▲ 399,965
2. 一般会計より繰入	100,000	100,000	0
3. 雜収入	350	350	0
合 計	2,425,247	2,025,282	▲ 399,965

支出の部	第57期	第58期	差異
1.次年度繰越金	2,425,247	2,025,282	▲ 399,965
合 計	2,425,247	2,025,282	▲ 399,965

「食と農」の博物館

現在開催中の企画展示

鶏ークラシックブリードの世界ー

【会 期】2017年8月30日(水)～10月15日(日)

【休館日】毎週月曜日、月曜が祝日の場合は開館し
翌火曜休館、月末最終火曜日

【入場料】無料

【主 催】「食と農」の博物館(館長:江口文陽)

【企 画】小川 博(東京農業大学農学部バイオセラピー学科教授)

【協 力】JSAC

今後開催予定の企画展示

国際食料情報学部4学科合同展 一つなぐー(仮題)

【会 期】2017年10月25日(水)～2018年3月11日(日)

【企画・主催】東京農業大学 国際食料情報学部

その他

博物館1階ロビーおよび2階にて常設展示を行っています。
開館等に関する情報はホームページでもご覧いただけます。


The screenshot shows the homepage of the International Agriculture Development Department at Nodai University. The header features the university's name in English and Japanese, along with the department's name. Below the header, there's a banner with the text "情熱ひろば" (Hotspot) and "国際協力できる人" (People who can contribute to international cooperation). The main content area includes a large image of a person working in a lab, and sections for news, events, and other departmental information.

2007年から国際農業開発学科を志望する中高生向けに学科を分かりやすく紹介するホームページ (<http://www.nodai.ac.jp/int/develop/index.html>) を公開しました。

海外実習や国内（学内・学外）実習、教員・学生の調査の様子、研究の様子について学部生・院生・教員からの投稿記事を随時掲載中。<http://nodai.cc-town.net/modules/nmblog/categories.php>。

国際協力を志すご子弟や教え子の進学先を考えていらっしゃる方、是非一度アクセスを。

研究室紹介

熱帯作物学研究室

熱帯作物学研究室は、現在、志和地弘信先生、入江憲治先生、パチャキルバビル先生、寺田順紀先生のご指導のもと、熱帯地域で栽培されている作物について研究しています。以下に主な研究内容を紹介します。

【ヤムイモ】ヤムイモは、一部の熱帯地域、特に西アフリカでは主食作物として栽培・利用されています。本研究室では世界各地から収集したヤムイモ約100系統を本学の宮古亜熱帯農場で継代・保存しており、生産性の改善に向けた新しい増殖方法や育種技術、ヤムイモの機械化栽培技術の開発を行ってきました。近年では、ヤムイモ遺伝資源における形態形質の解明やDNAマーカーを用いた系統解析、内生窒素固定細菌の探索について研究を進めています。

【イネ】イネでは、品種保存や育種の基礎的な情報となる有用形質の遺伝解析、育種素材の選抜・評価、栽培技術の改善などの研究を行なっています。品種保存では、世界各地から採取したイネを1,000種類ほど保管し、その中から毎年100品種ほど棚沢圃場に植え種子更新を行っています。研究では、アルカリ抵抗性の評価と選抜を行っています。植物にとって一般的に害となる塩基性土壌における生育を調べることで、将来、厳しい条件下でも育つイネの品種の育成をめざし研究に取り組んでいます。

【遺伝資源】地球規模での食料問題を解決するためには、植物遺伝資源を有効活用し作物生産性を向上することが必要不可欠です。そこで、熱帯・亜熱帯地域において有用植物遺伝資源を探索収集し、その特性の評価および繁殖、保全に取り組んでいます。現在はカラシナを中心としたアブラナ科やローズルについて、開花特性や耐暑性、有用成分含量の評価を行っています。以上の研究以外にもサトウキビの交雑、落花生の耐乾性試験など多種多様な研究テーマに取り組んでいます。

主な学生活動:研究室の学生は、1・2年生は毎年5月、8月、11月に北軽井沢の農家で、それぞれ3泊4日の日程で農業合宿を行っています。入学したばかりの1年生は鎌の研ぎ方など基礎的な技術の修得はもちろん、目上の方との付き合い方や集団生活のルールなど必要最低限のマナーを身につける合宿もあります。1・2年生にとっては、上下関係が厳しい熱帯作物学研究室に4年間在籍するために必要な知識が得られる重要な合宿です。3年生になると温室や圃場、研究室で保存・栽培している植物の管理など研究室活動の中心的な役割を果たすようになります。毎年、3年生を中心となりテーマを決め勉強会を行い、収穫祭の文化学術展に出

展しています。文化学術展への出展は大学生活のうち最も力を注ぐイベントであるだけに、達成感が大きく、大きな自信に繋がります。4年生は研究室全体をまとめながら、それぞれの卒業論文の実験や調査に取り組んでいます。学生生活最後の年であり、エンジョイしたいところですが、実験で使う畑での除草、水やりや調査などに追われる毎日です。そして、さらに専門的な知識や理論を学びたい学生は大学院に進み、研究中心の生活に入ります。

研究室の年間行事として、5月に新入生歓迎会、6月に研修旅行、7月と12月末には納会、10月に熱帯作物学研究室OB会、11月に芋祭り、2月に卒業生追い出しコンペがあります。また、毎週木曜日には先生方を交えた昼食会があります。学生は、時にはふざけ合ったり、時にはまじめに語り合ったり、つらい農作業を皆で協力し合いながら、充実した研究室生活を送っています。

現在、熱帯作物学研究室には74名が入室しており、そのうち学部生が61名、大学院生が13名の大所帯です。室員のうちナイジェリアから3名、ミャンマーから2名、コートジボワール、エチオピア、アフガニスタンそしてタイからそれぞれ1名ずつ、計9名の留学生が在籍しています。最近、研究室内では、英語や中国語やフランス語やスペイン語などが飛び交うことが日常的になってきており、国際色豊かです。来日したばかりで日本語を十分に理解できない留学生もいるため、ゼミなどでは共通語が英語になるケースも少しずつ増えています。一人の力ではできない農作業を伴う研究が中心であるため、言葉や習慣などの壁を乗り越え、お互い協力し合いながら日々の研究生活を送っています。国際協力の仕事に就くことをを目指している学生にとっては、毎日の研究生活が良い訓練になっています。



おいしさは愛。

ハム工房ぐるーぱるのハム＆ソーセージは、《和豚もちぶた》を100%使用しひとつひとつ手間と時間をかけてつくられます。

ハム工房
ぐるーぱる

〒377-0052 群馬県渋川市北橘町上箱田800
TEL 0279-52-3746 FAX 0279-52-3581
フリーダイヤル 0120-44-3746

クローバルピックファーム株式会社
代表取締役 赤地 勝美（拓殖5期）
URL <http://www.gpf.co.jp>